



鮎鮓の原料となる
ニゴロブナ

地域でのフィールド調査・研究の情報

びわ湖のふるさと「ヨシ原」ーヨシ原を利用するいきものたちー

総括学芸員 桑原 雅之

びわ湖のふるさとヨシ原

琵琶湖の湖岸に広がるヨシの群落「ヨシ原」は、琵琶湖の原風景の一つと言っても過言ではないでしょう。かつて、琵琶湖では内湖や遠浅になっている湖岸を中心に、約260ha(1953年当時)ものヨシ原が広がっていました。これらのヨシ原は水位の変化によって陸ヨシになったり水ヨシになったりします。特に春から梅雨時にかけての雨の多い時期には、琵琶湖の水位が上昇し水ヨシのしげる広大な湿地帯が広がります。このようなヨシ原の中は、群生するヨシのおかげで多少の風雨ではかくらん攪乱されない安定した環境となり、外敵からも見つかりにくく、小動物にとっては格好のすみかとなっています。

また、水ヨシの広がる湿地帯は栄養分が豊富で、魚の稚魚やエビ類などの餌になる小さな生き物が無数に生息しています。そのため、この時期琵琶湖に生息する多くの魚たちが、ヨシ原に集まってきて産卵し、生まれた稚魚は琵琶湖に泳ぎ出ることができるようになるまで栄養豊富なヨシ原で成長します。

さらには、「にお鳩」とも呼ばれる滋賀県の鳥カイツブリは、ヨシ原の中をすみかとするこれら

の稚魚やエビなどの小動物を利用して、子育てをしています。

もう一つ、水につかったヨシの茎の表面には、無数の微生物が付着して生活しています。これらの微生物は水の中の栄養分を吸収し、琵琶湖の水を浄化する役割も担っています。このように、琵琶湖にすむ生き物にとってヨシ原は「ふるさと」ともいえる存在なのです。

変わりゆくヨシ原

湖岸に広がるヨシ原は、生活資材として利用するために刈り取りを行ったり、ふな鮓の材料とな



写真1 西の湖に広がるヨシ原

るニゴロブナを漁獲する場所であったりと、人の生活とも密接に関係してきました。しかし、人口が増加し人の暮らしが豊かになるにつれて、ヨシ原の広がる内湖は農地の造成のために干拓や埋め立てが進められてきました。1972年に開始された琵琶湖総合開発では、利水と治水を目的として琵琶湖の周囲に湖岸堤が建設されました。その結果、1992年にはヨシ原の面積は130haにまで減少してしまいました。

また、ウシガエルやアメリカザリガニ、1980年代中頃から急増してきたブラックバスやブルーギルなどの外来生物がヨシ原にもはびこってくるようになり、ヨシ原を利用する生き物の代表ともいえるニゴロブナの漁獲量は、最盛期の1割以下にまで減少してしまいました。また、ヨシ原で繁殖するカイツブリも数を減らし、かつて「鳩の湖」とも呼ばれた琵琶湖の面影は失われつつあります。

しかし、1992年7月には「滋賀県琵琶湖のヨシ群落の保全に関する条例」が施行され、残され



写真2 コイの産卵

たヨシ原の保全と再生の活動が始まりました。それと歩調を合わせるように、内湖の再生に関する研究も進められています。そうした活動の成果が現れ始めたのか、徐々にヨシ原で産卵する在来魚の数も増えてきているようです。

このようなヨシ原とそこにすむ生き物を紹介する今回の水族企画展示は、夏休み期間中の7月19日(土)から8月31日(日)まで開催しています。お楽しみに!!

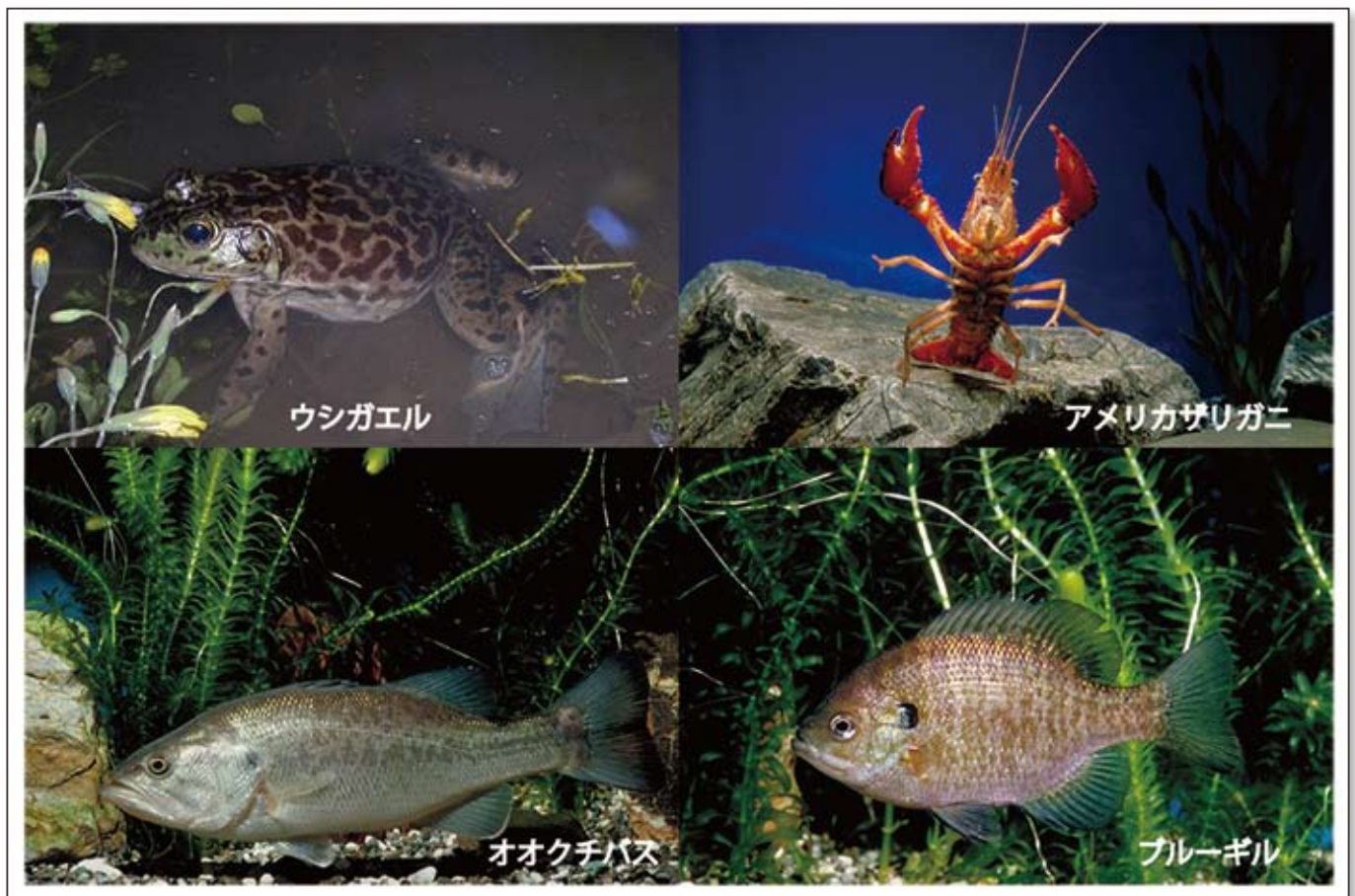


写真3 ヨシ原で見られる外来生物

造成ヨシ帯の機能調査からわかったこと

滋賀県水産試験場 主任専門員 井出充彦

琵琶湖では湖岸の開発などで、ニゴロブナなどのコイ科魚類の産卵・繁殖場として重要な「水に浸かったヨシの群落帯」(水ヨシ帯)が減少しました。これを回復させるため、県水産課では奥行き 30m 以上の水ヨシ帯を、2017 年度までに 34ha 造成することを目標に毎年約 1ha ずつ造成しています。

水産試験場では、2013 年 4 月から 7 月にかけて、北湖の丁野木地区と南湖の赤野井地区の造成ヨシ帯で、コイ科魚類の産卵や仔稚魚の発生状況を調査しました。

造成から 10 年近く経過した丁野木地区では外から運ばれた土砂がヨシ帯内に堆積しており、琵琶湖水位が例年より低く推移したことで、特に 6 月上旬以降ではその面積の約 80%が干出しました。幸い造成ヨシ帯と湖岸との間の比較的深い水



写真1 赤野井地区造成ヨシ帯

面に濃密な自然植生帯が形成されており、そこでコイ科魚類の産卵が行われ、仔稚魚も 7 月上旬までタモ網で多く採捕できました。

造成から 2 年目の赤野井地区では、内部の水深が 6 月下旬までは大部分が 20cm 以上と十分にあり、産卵数は丁野木地区より多い状況でした。しかし、湖岸との間の水面には自然植生の密度が薄く、タモ網では、その水面でコイ科仔稚魚に混じってオオクチバス稚魚が採捕されるようになり、7 月上旬にはオオクチバス稚魚のみとなりました。

以上のように、造成ヨシ帯の機能を維持するためには、コイ科魚類の産卵繁殖期の水位の維持と、オオクチバス対策(積極的駆除・侵入防止)が必要であることがわかりました。



写真2 造成ヨシ帯付近で採捕したフナ類稚魚(丁野木)

ヨシ帯の忍者 アオヤンマ

Aeschnophlebia longistigma Selys

専門学芸員 柗永一宏

アオヤンマはオス、メスともに若草色のきれいなトンボです。この体色からタケヤンマと呼ばれることもあり、7~8センチほどの比較的大きなヤンマの仲間です。成虫は5月上旬から8月にかけて見られ、特に5月下旬から7月にかけてよく

見られるようです。オスはヨシ帯の中を縫うように飛翔してメスを探します。体の色がヨシの色とよく似ており、動きが素早く、スッとヨシ帯の中に入ってしまうので、その姿を見失います。まるでヨシ帯の忍者のようです。運良くメスと出会う



と、近くのヨシや木の枝などにとまり交尾を続け（写真）、卵はヨシの茎の中に生み付けられます。アオヤンマは北海道から九州にかけて分布していますが、生息地であるヨシが生える環境の減少にともない、このトンボの数も減ってきています。

ヨシ帯のある水辺には、アオヤンマの他にも色々なトンボがやってきます。この夏、トンボの観察に出かけてみませんか。

写真：マルバヤナギの枝に止まる交尾中のアオヤンマ。上がオス、下がメス。（天野一葉撮影）

【資料裏話 その14】 地域の宝、どう活かす？

学芸員 大久保実香

ヨシ博物館は、ヨシの研究で知られる西川嘉廣さんが、近江八幡市円山町のご自宅の蔵に作った博物館です。ヨシ原のすぐそばにあり、ヨシの卸売業を営む西川さんのお話を伺える、まさに地域に根差した博物館でした。

2012年、西川さんがお亡くなりになり、資料の保存を考えた結果、琵琶湖博物館の収蔵庫で保管することになりました。その数3,930点。大学生や地元の方にもご協力いただき、目録を作成し搬入しました。お菓子の袋や食器など、一見なんだろうと思う資料にも、よくよく

見るとヨシとのつながりが隠されており、西川さんのヨシへの深い愛情が読み取れます。ご遺志を受け継いで、資料をどう活かせるか、地元の皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

ひっそりと個人で営む、堂々とした博物館が、県内にはいくつもあります。そこには、西川さんのように資料へのこだわりと愛にあふれた館長さんがいらっしゃるはず。地域の宝を地域で守る小さな博物館へ、足を運んでみませんか？



写真：ヨシ博物館での作業風景

● 編集後記 ●

「生活の知恵」は、身のまわりにあるものをいかに活用するかが「鍵」になると思います。限りある資源を未永く使おうとすると、大事なのは創意工夫です。様々な生きものが「自然の恵み」を活かす知恵をもっているのに驚かされます。（不熟）

鳥の目 魚の目 クイズ

「滋賀の県鳥」

琵琶湖を代表する水鳥で、県の鳥にもなっているカイツブリには、別の呼び名があります。琵琶湖の別名としても使われるこの呼び名は何でしょう。

- ① イオ
- ② ニオ
- ③ ミオ

答えは、紙面のどこかにあります。

◆ 巻頭写真の説明 ◆

鮎鮓の原料としてよく知られているニゴロブナは、その昔、春になると湖岸のヨシ帯に水面が盛り上がるほど産卵に集まり、漁師はこれを「イオ島」と呼んでいました。

鮎鮓はこの時期大量に獲れるニゴロブナを保存する目的で作られたと言われています。